

九月四日

岡本綺堂

青空文庫

久しぶりで 麴町こうじまち 元園町もとぞのちよう の旧宅地附近へ行つて見た。九月四日、この朔日には震災一週年の握り飯を食わされたので、きようは他の用達ようたしを兼ねてその焼跡を見て来たいような気になつたのである。

旧宅地の管理は同町内の〇氏に依頼してあるので、去年以来わたしは滅多めったに見廻つたこともない。区劃整理はなかなか捗取はかどりそうもないので、わざわざ見廻りにゆく必要もないのである。それでも震災から満一カ年後の今日、その辺はどんなに変つたかという一種の興味に釣られて出てゆくと、麴町の電車通りはバラックながらも昔馴染の商店が建ちつづいていゝ。多少は看板の変つて

いるのもあるが、大抵は昔のままであるのも何となく嬉しかった。しかもわたしの旧宅地附近は元来が住宅区域であつたので、再築に取りかかった家は甚だ少い。筋向いのT氏は震災後まだ一月を経ないうちに、手早くバラックを建築してしまったので、これは勿論そのままに残っている。北隣のK氏は先頃から改築に着手して、これももう大抵は出来あがっている。わたしの横町附近でわたしの眼に這入^{はい}つたものはこの二つの建物だけで、他はすべて茫茫たる草原であるから、番町までが一目に見渡される。誰も草採りをする者もないので、名も知れない雑草は往来のまん中にまで遠慮なくはびこつて、僅かに細い通路を残しているばかりであるが、それも半分は草に埋められて、路^{みち}があるかないか判らない。

誰がどこの土を運んで来て、なんのために積んだのか捨てたのか知らないが、そこらにはかつて見たこともない小さい丘のようなものが幾カ所も作られて、そこにも雑草がおどろに乱れている。まったく文字通りに荒涼たるありさまで、さながら武蔵野の縮図を見せられたようにも感じられた。

大かたこんなことであろうと予想してはいたものの、よくも思い切って荒れ果てたものである。夏草や兵者どもの夢の跡——わたしも芭蕉翁を気取って、しばらく黯あんぜん然たらざるを得なかった。まことに月並の感想であるが、この場合そう感じるのほかほかはないのである。

隣にK氏の新しい建物が立っているので、わたしの旧宅地もす

ぐに見出されたが、さもなければ容易にその見当が付き兼ねて、路に迷った旅人のように、この草原のなかを空しくさまよっている事になったかも知れない。わたしは自分の脊よりも高い草をかき分けて、ともかくも旧宅のあとへ踏み込んでみると、平地であったはずのところがあるいは高く、あるいは低く、なんだか陥おとしあなつたでもありそうに思われて迂濶うかつには歩かれない。わたしの庭に芒すすきなどは一株も栽えていなかったのであるが、どこから種を吹き寄せて来たものか、高い芒がむやみに生いしげって、薄白い穂を真昼の風になびかせているのも寂しかった。虫もしきりに鳴いている。白い蝶や赤い蜻蛉もみだれ合って飛んでいる。わたしはここで十年のあいだに色々の原稿を書きつづけた。ここから母と甥と

の葬式を出した。そんなことをそれからそれへと考えると、まったく蕉翁のいわゆる「夢の跡」である。

いたずらに感傷的の気分^のに浸っていても仕様がなないので、うるさく付き纏つて来る藪蚊を袖で払いながら、わたしは早々にここを立退いた。K氏の普請場に家の人は見えなかつたので、挨拶もせず^{たちの}に帰つた。

それからO氏の家をたずねて、玄関先で十五分ばかり話して別れた後、足ついでに近所を一巡すると、途中でいくたびか知人に出逢つた。男もあれば、女もある。その懐しい人々の口からその後の出来事について色々の報告を聞かされたが、特にわたしを驚かしたのは、死んだ人の多いことであつた。

震災当時、麴町には殆どほとん数えるほどの死傷者もなかった。甲の主人、乙の細君、丙のおかみさん、その人々の死んだのは皆その以後のことである。勿論、死んだ人々は皆それぞれその寿命であつて、震災とは何の関係もないのであるかも知れないが、わずかに一年を過ぎないあいだにこうも続々たお仆れたのは、やはりかの震災に何かの縁を引いているように思われてならない。その死因は脳充血とか心臓破裂とか急性腎臓炎とか大腸加答児カタルとかいうような急性の病気が多かったらしい。それには罹災りさい後のよんどころない不摂生もあろう。罹災後の重なる心労もあろう。罹災者はいずれもその肉体上に、精神上に、多少の打撃を蒙こうむらない者はない。その打撃の強かつたもの、あるいはその打撃に堪え得られなかつた

者は、更に不幸の運命に導かれて行つたのではあるまいか。死んだ人々のうちに婦人の多いということも、注意に値すると思われた。

その当時、直ちただに梁はりに撃うたれ、直ちに火やに焚やかれたものは、勿論悲惨の極みである。しかも一いったん旦は幸いにその危機を脱出し得ながら、その後更に肉体にも精神にも種々の艱苦かんくを嘗なめて、結局は死の手を免れ得なかつた人々もまた悲惨である。畳の上で死なれたのが幸いであるといえばいうようなものの、前者と後者とのあいだに著るしい相違はないように思われる。特にわたしの近所ばかりでなく、不幸なる後者は到るところの罹災者のあいだにも見出されるのではあるまいか。また、その人々のうちには、あの

時いつそ一ひと思いに死んだ方が優ましであつたなどと思つた人もないとはいえない。世に悼いたましいことである。

番町辺へ行つてみると、荒涼のありさまは更にひどかつた。こころは比較的に大邸宅が多いので、慌ててバラックなどを建てるものはなく、区劃整理の決定するまでは皆そのままに打捨うててあるので、そこもここも一面の芒原である。そのなかに半分毀こわれかかつた家などが化物屋敷のように残っているのも物凄く見られた。日中は格別、日没後に婦人などは安心してこころを通行することは出来そうもない。

区劃整理はいつ決定するのか、東京市内の草原はいつ取除けられるのか。今のありさまではわたしも当分は古巢へ戻ることを許

されぬであろう。先月以来照りつづいた空は青々と晴れている。地にも青い草が戦そよいでいる。わたしは荒野を辿たどるような寂しい心持で、電車道の方へ引返した。

（大正十三年九月）

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「猫やなぎ」岡倉書房

1934（昭和9）年4月初版発行

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

九月四日

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>